

---

## 書評

---

遠藤 薫 著

### 『ロボットが家にやってきたら

### ——人間とAIの未来』

(岩波書店, 2018年, 新書判, 192頁, 800円+税)

鶴見大学 椋 本 輔

Tsurumi University Tasuku MUKUMOTO

---

現在, 第三次の「人工知能ブーム」と言われる社会的状況の渦中で, 各分野の研究上の関わりのみならず, 学生ひいてはより若い人達に対して何をどのように教えるべきかという問題意識は, 本学会員にも広く共有されているだろう。

本書は岩波ジュニア新書の一冊として、『ロボットが家にやってきたら…』という主題で「ドラえもん」のような身近なイメージを喚起しつつ, 副題に「人間とAIの未来」と有る通り, 全体としてはより広く情報技術と人間・社会との関係について, 著者が専門とする社会学の調査研究からの知見, そして幅広い人文系の学知を踏まえ, 平易な語り口でまとめられた, 入門・教養書である。

まず序章では, 日常生活の中に現れ始めている様々な「ロボット」や, 非日常的だが人間の生死に関わる「軍事ロボット/AI兵器」まで, 実際に「やってきつつある」現状を俯瞰している。また, お掃除ロボットやドローンといった様々な形態をした「便利な機械としてのロボット」と, 人間の姿形を模倣した「人間型ロボット (ヒューマノイド)」を分けているが, 後者の延長に「ボー

カロイド〈初音ミク〉」まで言及していることは, 後述する本書の主張と深く関わっている。なお, タイトルに掲げられた「ロボット」と「AI」については

AIは生命体の思考・感覚機能を模擬したものであり, ロボットは人工知能を備えた自動機械である (P. 12)

と整理・定義した上で, 議論が進められて行く。

第2章・第3章においては, 自分達の「弱さ」を補うために様々な技術・道具を発展させてきた人間が, 現在の社会状況として直面しているリスク・不安と, その中で人々が「ロボット・AI」に抱いている期待・不安について, 著者自身による2015年5月の「生命倫理に関する意識調査」のデータおよびその他の統計資料を踏まえて, 定量的な考察がなされている。そこで見出された人々の意識の根源や, 文化圏による差異, 特に日本における「ロボット観」が「人間型」に偏重しており「AI」技術の発展には足枷になっている

と言われる問題について、第4章以降では幅広い人文知を組み合わせた解説・考察がなされている。非常に幅広く多岐にわたるため、ここで詳細を紹介することは叶わないが、ヨーロッパ中世から近世にかけての社会思想と科学・医学の相互関係や、それが産業革命を通して近代資本主義をもたらした連続的過程、機械技術の実用化・発展と共に「人間観」も変化して行った歴史、など様々な人文的教養への入り口ともなっている。

大きな流れとしては、「時計技術」を中心に置き、欧米ではそれが上記のような体系的な知により（人間の身体だけでなく知能も含めて）世界を解明した成果としての「自動機械」「自動人形」へと発展し、日本ではむしろ「からくり」として「見せ物」的な方向で発展した、と概観されている。さらに、「物語のなかのロボット」についても『フランケンシュタイン』やカレル・チャペック、アイザック・アシモフのみならず、日本の『西行撰集抄』や柳田國男らが集めた近代の風説まで取り上げることで、「人間を超える人間を人間が作り出す」ことが目指されてきた欧米では技術の不断な進歩と同時に「人間とロボットの闘い」という意識も生まれやすいのに対して、日本では「人間の社交や神との対話を媒介する」ことが目指されてきたため不断な技術的進歩が促され難い、という文化的背景を指摘している。

しかし、本書の終盤では「共進化」をキーワードに、むしろ現代のグローバル化社会の中で「ロボット・AI」はじめ情報技術の実用化・普及を通して、それぞれ異なってきた文化が融合していく可能性が描かれ、ロボットと人間の間についても、アラン・ケイの議論や、ヴァルター・ベンヤミンの「第二の技術」の概念、ダナ・ハラウェイの「伴侶種」の概念を援用することで、「共進化」「共生」の可能性を描いている。

そして終章では、IoT・IoEといった趨勢も含め、「家にやってくるロボット達」がインターネットによって結ばれた巨大なAIとなって行く＝H.

G.ウェルズが描いた〈世界脳〉的未来について、ジョージ・オーウェルの『1984年』やミシェル・フーコーの「アルシーヴ」論を引いて徹底的な管理社会といった新たな災禍につながる恐れにも触れつつ、むしろ我々が主体的に関わって行く「世界の知のアルシーヴ」としての〈世界脳〉の可能性を提案することで、我々が「ロボット・AI」との関係新しい「他者」との〈共生〉として真剣に考え、より良い社会を作っていくことを強く訴えている。著者にとって、そうした「共生関係」を示唆する身近な具体例が、日本文化の「からくり」の流れも汲む「ボーカロイド〈初音ミク〉」なのであろう。

このように、幅広い人文知を踏まえることで、「ロボット・AIが家にやってくること／やってくる社会」についての、より良いあり方や希望を見出そう（それを若い人達に知らせよう）という著者の意思には深く共感すると同時に、著者自身も

ただ、気をつけなければならないのは、少なくとも現在まで、ロボットは自発的に悪事を働こうとしているわけではない。背後には、常に、「人間」という黒幕がいる。(P. 54)

と書いているように、喫緊の社会的問題として我々が直面しているのは、人間と共生・共進化し得るような〈ヒューマノイド〉的「ロボット・AI」というよりも、人間の（しかも人格的「黒幕」というより正に〈世界脳〉のように集合的な）欲望や経済的利潤の追求を自動化して暴力的なまでに増幅させてしまう〈エージェント〉的情報技術と、我々人間との関係ではないだろうか。そうした状況に対しては、本書の議論で希望を託されている「ボーカロイド〈初音ミク〉」のような存在についても、著者が言うように「人間の妄想力」によって「キャラクターをかぶせて了解」している、すなわち「擬人化」であることが、まずはより意識化される必要が有るのではないだろうか。

しかしもちろん、そうした「ロボット・AI」  
についての「明」と「暗」のバランスは、本書の

内容から発展して、我々皆が考え続けながら、教  
え／議論して行くべき本質的な課題である。

